キマイラ的実在の再現

——アリストテレスのイデア数批判——

西岡千尋（東京大学）

「イデア数」（イデアとしての数）は名前の通りプラトンのイデアに関係する概念である。数学の営みで用いられる数（数学的な数）に対比して、イデアに等しい性質をもつ数と理解される。この特別な数は、プラトンを筆頭とする初期アカデメイア派の学説としてアリストテレスによって報告される。直接プラトンの対話篇に遡れるかどうかには疑問の余地があるが、同時代人としてイデア論を受け止めたアカデメイア出身の哲学者たちが、それをどのような問題として捉えなおし、応答したのかを知るための第一級のキーワードである。本発表では、「イデア数」概念の主要典拠であるアリストテレスの『メタフュシカ（形而上学）』M巻6-9章を資料として、イデア数がどのようなものとして、どのような文脈において描き出されたのかを解明する。本稿の主な着眼点は、M 巻1章で掲げられる全探究課題（プログラム）の構成、およびこの巻に哲学とならんで登場する、数学（2-3 章ほか）と問答法（4 章）という二つの知的領域である。

研究史の進展に応じて、M 巻が真正のアリストテレス著作であり（19 世紀には偽作説をとる論者がいた）、周到な計画をもって書かれた重厚な論文であること（Jaeger）、MN 巻の批判の主たる標的がマイナーな人物やプラトン主義を誤解した人々の意見に帰着するのではなく、プラトン本人に帰される哲学であること（Annas, Burnyeat）、さらに 6-9 章のイデア数の議論は、MN 巻全体の計画の最終部（第三プログラム）に当たること（Berti, Mueller, Crubellier, Cleary）などが、段階的に明らかにされてきた。これらは議論内容の実質を検討するための基本的な土台となる成果と言えるが、先行研究は次の二点で十分ではない。まず「イデア数」の議論に先行する部分（つまり二つの予備プログラム）が果たしている役割が明確でなく、したがって論述の全体像——アリストテレスはどの点に依拠して議論を練り上げ、どこに向かおうとしているのか——が見えていない点である。もう一つは、「イデア数」という概念の特殊さや歴史性に注目するあまり、この概念に関するアリストテレスの問題意識が見過ごされている点である。ゆえに従来のアプローチは、プラトン対話篇との関係づけ、イデア数自体の理論的復元、アリストテレスの各論証の吟味等に留まっており、イデア数批判を取り囲む哲学的脈絡を欠いている。

最初に本稿の考える MN 巻のプログラム全体を示す。すでに筆者は M 巻の第一プログラム（2-3 章）および第二プログラム（4-5 章）の研究を通じて、それぞれ異なった仕方において、数学と哲学の関係が問われていることを明らかにした。また古註（5 世紀のシュリアノスと 12 世紀のエフェソスのミカエル）の読解作業をもとに、解釈史全体のゆらぎを観察してきた。これらの成果にもとづき、三つ組のプログラムの内容と配分（各章がどこに入るか）を明示する。今回の主題にとって最も大きな異論となるのは、6-9 章を第三プログラムに含めない二つの古註、および現代におけるRealeとAnnasの解釈である。古代後期の読み方に対しては、第二プログラムが 5 章と 6 章の間で区切られていること（この点はすべての近代以降の研究で一致している）によって応え、6-9 章を「脱線部」と見なす現代の異論に対しては、「イデア数が χωριστά であるか」という問い（M 6, 1080a14/ M 9, 1085b34-36）が第三のプログラムに当たることによって応える。なおイデア数の議論を脱線部と見なす読み方によっては、最初の二つの予備的なプログラムが用意されたことの積極的な意味が分からなくなる。というのは、プログラムの割り当て、とくに第一、第二プログラムで別個に数学的対象とイデアに帰されている規定は、続くイデア数の再現を先取りしているからである。

そこで M 巻 6 章の数と数論者の分類、そして M 巻 7 章の三種の単一（μονάς）の検討に入る。6-7 章における数や単一の区分には、一貫して三つの型が見られる。①すべて比較可能的（συμβλητός）であるか、②すべて比較不可能的（ἀσύμβλητος）であるか、③ある単一は比較可能的であり、ある単一は比較不可能的であるかである。①は数学的な操作が可能な数であり、数学者たちに帰属する（＝第一プログラム）。②はどんな数学的な操作も拒む端的な想定であるが、「比較不可能的」という性質が「事物から分離される」（1080a37-b1）とパラフレーズされるため、イデアに帰された第二プログラムの規定と符合する。そして③は両方の特性を（恣意的に）備える第三のものとして導かれるイデア数である。このような複合性は、πλασματῶδες（拵えもの）という造語によって鮮明にされる。この語が糾弾するのは、数学的な単一がイデアの仮定に合わせて「ウーシアの差異性」を強いられている点である。イデア数という概念に、第一、第二プログラムの予備議論が入れ子構造のように折りたたまれることによって、イデア数が数学的な性質を免れないイデア（哲学の対象）であり、ほんらいは相反する両規定が衝突している事態が導かれる。

M巻8章では、イデア数の生成が質料形相論を用いて分析される。イデア数「二」が生成するとき、「二」の要素である単一は質料であり、「二」の全体を規定する単一は形相になる。前者が数の数えられる単一という側面を代表し、後者が普遍的な規定であるという点で、こちらのケースにも第一、第二プログラムまで遡る衝突を見出すことができる。アリストテレスに言わせれば、この混同の原因は「同時に数学的対象と普遍的なものから狩りたてた」ことにあった。イデア数の発生原因において、数学分野に通用する思考に、物事の普遍的規定を見て取ろうとする問答法的な思考が対置されている。

最後に、M 巻 9 章の前半において数に続くものとしての図形（点・線・面）に言及されたのち、「数と大きさ」についての論駁は一旦閉じられる。JaegerやCrubellierら多くの研究者はここで議論が切れ、続く議論はむしろ N 巻に属する主題（原理論）と理解するが、もしこのような区切りを認めるとしても、9 章後半で展開されるイデア批判との連続性をすくい取ることは可能である。それは普遍的なものを「分離される実在」として扱うことに関する批判点である（1085a23-29/ 1086b2-13）。どこに οὐσία を据えるかという問題については、普遍をめぐる哲学と問答法の方法的段差（Cf. 987b29-33, 1004b8-22）が念頭に置かれていると思われる。

以上の議論から、アリストテレスが哲学・数学・問答法という三つの領域をまたぐ複合的な実在としてイデア数を再現したと結論づける。イデア論が MN 巻でこのような奇怪な三つ巴として描かれている背景には、数学や問答法の領域が Γ や E 巻で理論的に区別され、形而上学（第一哲学）の範囲が確定できるにもかかわらず、同時代のプラトニストの学説がすでに横断的であった点が挙げられる。しかし筆者は、これが単に当時の歴史的な環境に左右された課題であったとは考えない。アリストテレスが再現したキマイラ的実在は、形而上学が普遍的性質のような言語的な規定や数的な規定（とりわけ「一」や「二」や「多」）といかに離れがたく密着しているか、それらの自覚的な分化がいかに難しいかという普遍的な問題を照らし出すと思われる。